HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター　第23号
Description	特集 河川の考古学
Issue Date	2016-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61255
Type	journal
File Information	newsletter23.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第23号　2016年3月

北海道大学 Hokkaido University
Archaeological Research Center News Letter

埋蔵文化財調査センター ニュースレター

特集　河川の考古学

本誌第2号（2007年12月）の特集では「埋没河川」を取り上げました。石狩平野の南西端、豊平川の扇状地の末端（扇端）から沖積地に移行する地点に位置する北大札幌キャンパスの地は、過去1万年にわたる河川の流下や洪水と土砂の堆積との繰り返しによって形成されてきました。北大開学の当時、札幌キャンパスにあたるところにはサクシュコトニ川とセロンペツ川という小河川が流れていましたが、流域の地下には無数にその支流の痕跡が埋もれているのです。昔の人たちは、水を求め、魚や獣を求めて、できたばかりのこれらの小河川の周辺に生活の場所を求めて集まってきました。この当たり前に思えるような生活様式は、実は地球全体の気温が上昇に転じて、やがて氷河期が終わってから以降（「後氷期」といいます）に実現したものです。海水面が上昇して、内陸まで入り込んだ海は新たな海浜環境をつくり、また沖積作用によって河川環境が整ってきました。後氷期の人類活動の最大の特徴は、このような「親水適応」といってもよいでしょう。豊平川扇状地の扇端の湧水地周辺から開発が始まった近代の札幌の街づくりもその例外ではありません。そして、そこに札幌農学校も開設されたのです。文字による記録が残される以前にさかのぼって河川の歴史をたどることは、人類史の探求にとって重要な研究課題です。＜河川の考古学＞の意義はそこにあります。

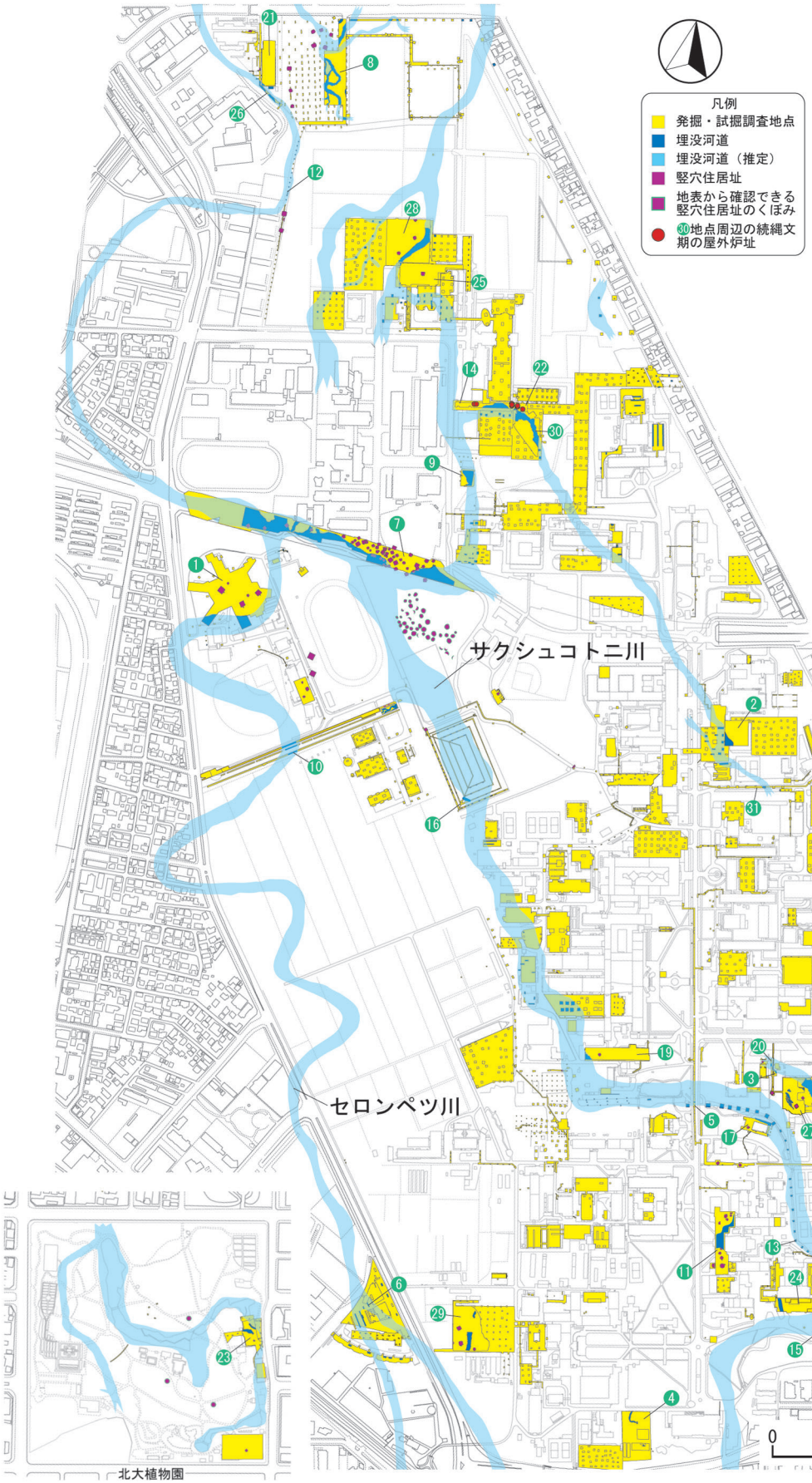
さて、第2号の刊行後しばらくして、当埋蔵文化財運営委員会の平川一臣委員（当時）から、自然地理学の専門分野では「埋没河川」という用語は無く、「旧河道」と呼ぶべきであるとのコメントがありました。考古学や埋蔵文化財の分野では発掘調査で発見された河川の痕跡に対しては「埋没河川」という名称が比較的普通に使用されていると思っていました。調べたところ、生態学の分野でも同じ用語の使用例を確認できましたが、それほど多くはないようでした。ある事典では「河川」の定義として「陸上の水が集って流れる細長い凹地（河道）を，そこを流れる水とともに河川という」などとあります。確かに「流れる水」を意味に含む「河川」が「埋もれている」という語感に違和感があるのかもしれません。そこで本誌ではそれ以降、「埋没河川（旧河道）」という折衷的な表記を使用してきましたが、本号ではあらためて「埋没河道」という用語の使用を提唱します。



▲発掘された埋没河道

2013・14年に緊急発掘調査したK39遺跡人獣共通感染症研究拠点施設地点では埋没している続縄文期の河道と、続縄文期後半から擦文文化（あるいはアイヌ文化期まで）にかけての旧河道とが発見されました.（矢印・記号は3頁に対応）

札幌キャンパスの「埋没河道」マップ





28 国際科学イノベーション拠点施設地点

蛇行する埋没河道とともに、それに沿った微高地状の平坦面からは、続縄文期後半から擦文文化前期にかけての遺構・遺物が確認されました。埋没河道内の堆積物は概ね砂→シルト→粘土→粘土・泥炭の順に、上方へむかうにつれ粒径が細粒化するとともに、有機物の集積が認められる傾向が観察されました。流水量の減少と枯渇、湿地化という変化がうかがえます。埋没河道内からは、擦文文化前期の遺物が下位の土層から、擦文中期の遺物が上位の土層から発見されています。擦文中期の段階では旧河道の湿地化が進行していたと考えられます。平坦面で集落の形成が擦文前期で終了していることは、こうした河川環境の変化が背景にあったとみられます。



26 南新川国際交流会館外溝地点

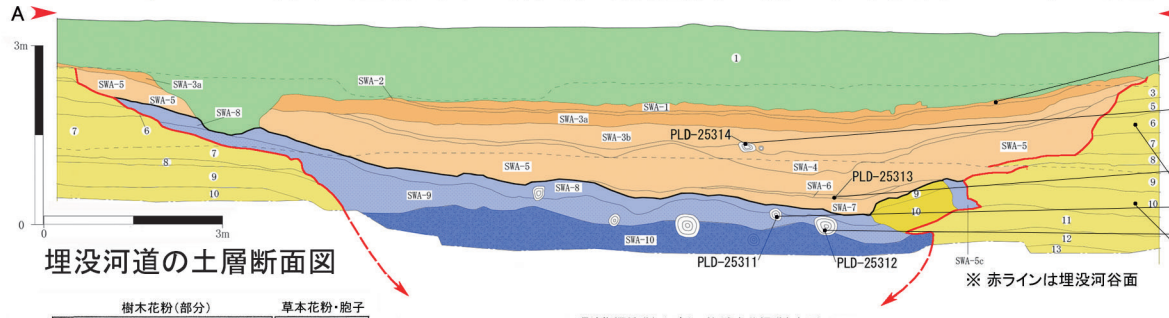
縦長の調査区で、擦文文化後期の地層（12世紀の竪穴住居址1基、土坑19基が包蔵されていました）を浸食した河道に土砂が堆積している状態を確認しました。河道に堆積した上位の土層には火山灰（樽前a火山灰：1739年噴出）が含まれています。下位の土層からはスギの板材が出土しました。

発掘調査前に、この埋没した旧河道を現地表面で確認することはできませんでした。（青色は発掘した河道）

《埋没河道を発見した調査地点》

1 恵迪寮（サクシュコトニ川）
2 学生部体育館
3 薬学部周辺整備
4 留学生センター
5 共同溝中央道路
6 桑園国際交流会館
7 エルムトンネル（K39第6次）
8 馬術部馬場（K435第2次）
9 第2農場倉庫（K39第9次）
10 西門
11 人文・社会科学総合教育研究棟
12 馬術部馬道
13 附属図書館本館北東
14 創成科学研究棟南
15 附属図書館本館南東
16 サッカー・ラグビー場
17 弓道場
18 薬学部研究棟
19 工学部共用実験研究棟
20 薬学部電気配線
21 南新川国際交流会館
22 北キャンパス道路地点北地区
23 植物園収蔵庫
24 附属図書館本館再生整備
25 北キャンパス総合研究棟6号館
26 南新川国際交流会館外構
27 薬学部ファーマサイエンス研究棟
28 国際科学イノベーション拠点施設
29 農学部実験実習棟
30 人獣共通感染症研究拠点施設
31 医学部地区雨水排水施設整備

30 K39人獣共通感染症研究拠点施設地点で発見された埋没河道

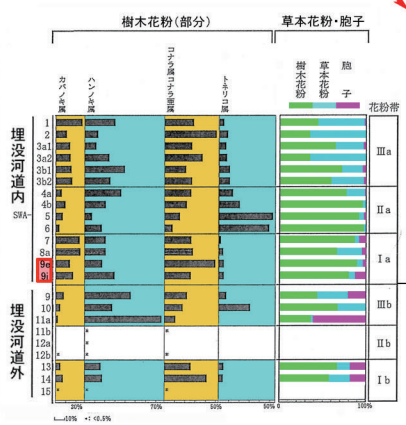


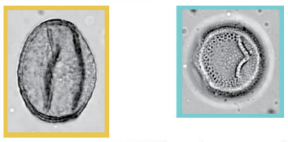
埋没河道の土層断面図

※ 赤ラインは埋没河谷面

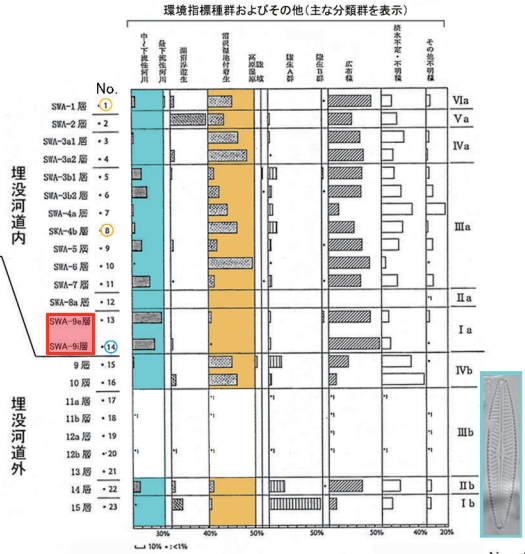
《^{14}Cの測定年代値》

- SWA-2層：15世紀中頃～17世紀前半
- SWA-4層：7世紀後半～9世紀中頃
- SWA-6層：321–398 cal AD
- SWA-9層上部：236–341 cal AD
- SWA-9層：132–243 cal AD
- 6層：252–385 cal AD
- 10層：362–202 cal BC

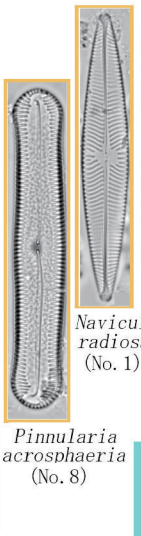




コナラ属コナラ亜属　トネリコ属
（SWA-7　PLC. 1421）（SWA-6　PLC. 1425）
堆積物中の花粉化石



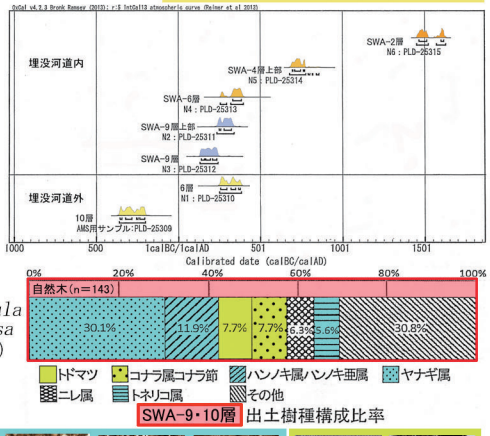
堆積物中の珪藻化石



Navicula radiosa
(No. 1)

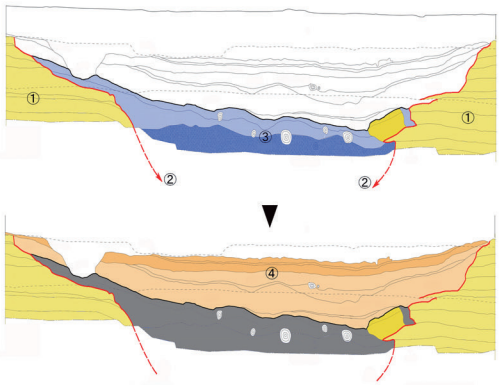
Pinnularia acrosphaeria
(No. 8)

Navicula cryptotenella
(No. 14)

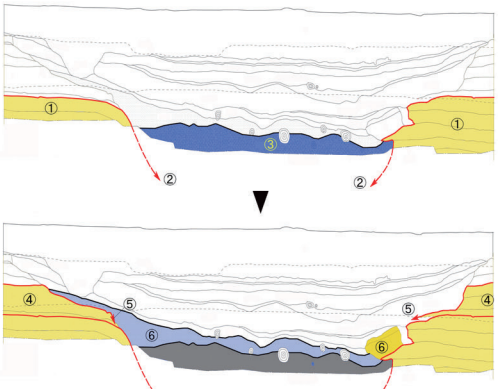


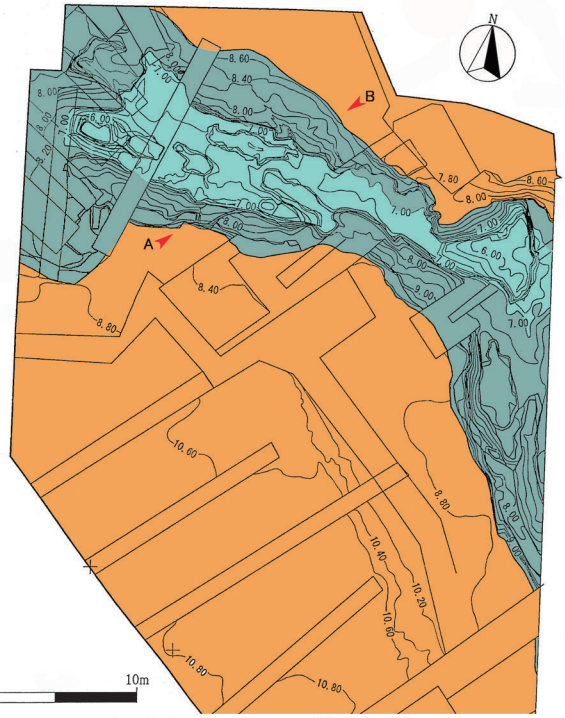
SWA-9・10層 出土樹種構成比率

埋没過程：A案　タテ：ヨコ＝1：0.7

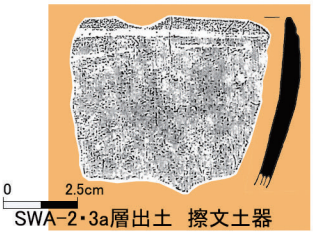


埋没過程：B案　タテ：ヨコ＝1：0.7



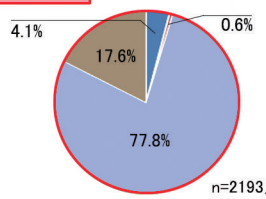


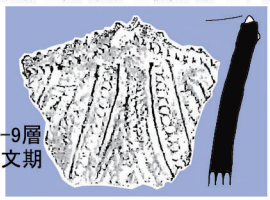
発掘された埋没河道の平面図



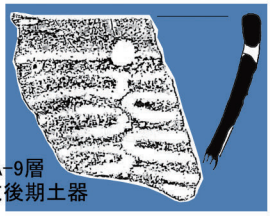
SWA-2・3a層出土　擦文土器

SWA-9・10層 出土土器破片数割合





SWA-9層
続縄文期
土器



SWA-9層
縄文後期土器

埋没河道の調査では、出土土器と理化学的な年代測定とで埋没過程の各時期を推定し、また各土層に含まれている花粉化石や珪藻化石、出土木材の分析によって古環境の推移の復元を試みました。続縄文期までは流水のあった小河川は、続縄文期後半ころからは流水も途絶えて三日月湖のような環境になり、擦文文化以降は低湿な凹地へと変遷しました。問題は、土層断面図の黄色系で表示した基盤土層（砂質シルト～粘土）が、続縄文期に小河川によって一気に下方浸食されて、その直後に青色系の砂礫層が堆積し、引き続いて続縄文期後半から擦文文化（あるいはアイヌ文化期まで）にかけて粘土（橙色系）が堆積したのか（A案）、基盤土層（黄色系）上部と河道下部の土層（青色系）とが交互に同時に堆積したのか（B案）の判定です。

（※ データ類の詳細は『北大構内の遺跡XXII』（2016）に掲載されています）

ゆく河のながれはたえずして、「旧河道」もやがて「埋没河道」に・・・

特集「埋没河川」の発行から8年、札幌キャンパス内での埋蔵文化財の調査もだいぶ進みました。本号では、これまでの発掘調査で明らかになった「埋没している河川の痕跡」を地図上に整理してみました。あわせて、その名称についても、より実際に近いものがよいと考えて、「埋没河道」(あるいは「埋没旧河道」)という用語の使用を提唱しました。流水の途絶えた「河川」は地表の窪地として「旧河道」になり、やがて完全に埋もれてしまい、「埋没(旧)河道」になる、という理解です。

考古学の研究対象である遺跡は、当時の人たちの行動の痕跡をとどめたものだけではなくて、人々がその地を離れた後、その行動痕跡は風化し、劣化して、やがて埋もれてゆきますが、そのすべてを遺跡化の過程(遺跡形成過程)として捉えて調査をし、研究を進めます。考古学の研究はタイム・カプセルを開ける(「ポンペイ的前提」といいます)かのように思われがちですが、実際には日常ではなかなか実感をもって考えることのできない悠久な時間の流れの中で、人類の活動を見つめ直す機会と情報を提供することです。開学以来、北大で実践されてきた研究と教育の営みは、後氷期という時間と環境の中で展開された人類活動の一環として今日も続けられています。

持続可能性とはスクラップ・アンド・ビルドといった営みのことではなく、まさにそのような認識の下に意義をもってくるのでしょう。札幌キャンパス内での埋蔵文化財の調査成果は新たなキャンパスプランにも大いに役立つものと期待しています。

第8回 調査成果報告会を開催しました (企画展示を同時開催中)

8回目となる報告会は、2015年度に行った3ヶ所の発掘調査の報告と札幌市埋蔵文化財センターの柏木大延氏による特別講演「擦文文化のカマド・支脚・甑」を行い、75名の方々にご来場いただきました。また、休憩時間と報告会終了後には現在開催中の企画展示「2015年度調査成果速報展」をセンター員の解説を交えながら見学をしていただきました。





報告会で発表を聴き、展示室では調査で出土した遺物などを見学しました。

編 集 後 記

センター化して1年が経ちます。新たな試みとして展示室を常時開設、本誌特集と成果報告会とに合わせて企画展示を開催。また来年度から本格的に実施される計画調査に向けて、これまでに蓄積した調査成果の総括的な整理を進めています。「埋没河道マップ」はその成果の一端です。本号では発掘調査報告書の内容をどのように活用できるのかを試みてみました。(小杉)

平成28年度の公開・普及活動の予定

○人類遺跡トレイルウォーク(2回)

夏と秋に、北大キャンパス内にあるサテライトサインをテーマに基づいて、訪ね歩きます。

○遺跡発掘調査現地説明会(2～3回)

発掘調査の期間中、進捗状況にあわせて発掘現場を公開し、調査成果を解説します。

○調査成果報告会(1回)

平成28年度の発掘調査成果の紹介と考古学に関連の深い分野の専門家による特別講演会を実施します。

○企画展示(3回)

ニュースレターの特集と調査成果報告会とに合わせた企画展示を行います。

ボランティア活動の受け入れについて(予告)

北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、発掘調査した文化財や情報を広く公開し、教育と研究に資するための活動を展開しております。当センターのこのような活動を、生涯学習社会における人々の自己実現の場としても位置づけて、ボランティアとしてご協力いただくための準備を現在進めております。上記の催しなどに参加して、一定の講習を受けていただいた後に、ボランティアとしての活躍を期待しております。ボランティアの活動内容や登録方法につきましては、近日中にホームページと本誌上でご案内いたします。

北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター　第23号
発行　：北海道大学埋蔵文化財調査センター　2016年3月25日
〒060-0811　札幌市北区北11条西7丁目
電話　：011-706-2671　FAX　:011-706-2094
e-mail：hokudaimaibun@gmail.com
URL　：http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~q16697/maibun/index.html
印刷　：柏楊印刷株式会社